



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第6回

靖国神社を知る

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

日本の夏は、戦争の歴史を思い返すことなくして過ぎることがありません。特にこの数年は、度重なる首相の参拝で靖国神社が問題の焦点となり、近隣諸国からも厳しい批判が寄せられています。この問題では、論ずる人がそれぞれに深い心情を抱えていて、なかなか冷静な議論を交わすことができません。しかし、これまで書いてきたところからすると、そういう問題こそ、ともに考えるための「座標軸」をどこかに求めたい、という気もして

まいります。

そのための第一歩は、やはり相手を知る、ということでしょう。それも、相手「について」論じた誰その意見を知る、というのではなく、相手の言葉に直接耳を傾けることが大切です。

「うーん、だからといって、自分でそこへ足を運ぶのは気が進まないし……」。そういう方のために、今日は同神社ホームページのバーチャル・ツアーをお勧めします (<http://www.yasukuni.or.jp/>)。なかなかよくできていて、居ながらにして概要がつかめますし、併設の「遊就館」の展示も一部見られます。何よりも、靖国神社自身の主張を正面からじっくりと読むことができます。

ここでは、政治の話はさておき、少し靖国を宗教の面から捉えてみましょう。同ホームページによると、拝殿と本殿とは宗教的な重みに違いがあります(ユダヤ教神殿の前庭

と聖所の区別に似ていますね)。一般の参拝者は、直接本殿に上がることはできず、まず玉串料を納め、お祓いを受けてから、ようやく昇殿することが許されます。これを読んで、「なるほど」と合点したことがありました。

実は、八五年に中曽根首相が参拝した時、政教分離に形ばかりの気がねをしたためか、この「お祓い」を受けない、と言い出しました。宗教的には、首相であろうと何であろうと、昇殿するからにはお祓いが不可欠です。

「お祓いは受けないが昇殿はする」という官房長官の談話は、神社宗教からすれば身勝手な傲慢に他ならないでしょう。しかたがないので、本人が記帳をしている間に、後ろから「陰ばらい」をしたとか。当時の宮司さんは、「人の家に泥靴で踏み込むようだ」と憤慨していました。

ところが、最近の報道では、もはやお互いそんなこともおかまいなしのようです。小泉

度重なる首相の参拝で靖国神社が問題の焦点となり、近隣諸国からも厳しい批判が寄せられています。

この問題では、論ずる人がそれぞれに深い心情を抱えていて、なかなか冷静な議論を交わすことができません。

ともに考えるための「座標軸」を求めるための第一歩は、やはり相手を知る、ということでしょう。

首相も、はじめは「お祓いを受けるという認識はない」と明言していましたが、今ではと

にかく自分も参拝したいし、神社側もしてもらいたい、という焦りが先に立っています。

お祓いなどという「些末な」宗教的行為は、

この際どちらでもよい、と言わんばかりです。国家とのつながりを維持しようとする、宗教施設としての自覚や矜持は、どうしても後退せざるをえません。

靖国が宗教施設である限り、わたしたちは、政治的には異なった見解をもつていても、多くの人がなご抱き続けている靖国への強い思いを、尊重しなければならぬでしょう。

しかし、このように政治と宗教を分けて考えることは、靖国については無理なのかもしれません。戦前の国家神道という経歴が、戦後の一宗教法人としての位置づけと、切れ目な

く連続してしまっているからです。

「国家宗教」であるかどうかはともかく、靖国が「民族宗教」であることにまちがいはありません。とすると、民族宗教につきものの困難な問いが、ここでも頭をもたげてきます。それは、自民族の祭礼を行うことを主たる存在理由とする宗教が、どのようにしてそれ以外の人々の尊厳に目を向けることができるのか、という問いです。英語版もある充実したホームページですが、この問いへの答えはそこに見いだせません。

ひるがえってみると、「世界宗教」であるはずのキリスト教も、時に民族宗教化することがあります。戦前のドイツ、アパルトヘイト時代の南アフリカ、それに現代の一部アメリカなどがその例ですが、そういう時には民族宗教よりもいっそうたちの悪い偏狭な宗教

が生まれます。わたしたちは、聖書が旧約新約を問わず、自民族を神格化する思想を一貫して拒否していることを、けっして忘れないようにしたいと思います。

最後に意外な発見を一つ。「奉納プロレス」ってご存じでしたか？ なぜ靖国でプロレスなのか、よくわかりませんが、「奉納相撲」に倣って力道山の時代にもあったようです。レスラーのみなさんは、揃って神妙に参拝し、お祓いを受けた後、ゴングならぬ法螺貝の音で試合を開始したとか。途中にはよさこいや漫才の披露もあります。いったいどこまでが本気なのか、神社広報によれば、祀られている御祭神にはスポーツ選手もいたから、「さぞかしお喜びで御覧になられていたことかと拝察致します」というコメントまで載せられています。某テレビ番組に出したら、きつとこれだけで「満へえ」続出でしょうね。

靖国神社のホームページには、他にもA級戦犯の分祀や、拝殿における他宗教儀式の可否についてなど、独自の宗教的見解が披露されています。ぜひ一度ご覧になって、考えの糸口にしてみてください。

ついでに、わたしのホームページもご紹介しておきましょう (<http://subsite.icu.ac.jp/people/morimoto/>)。この連載コラムもそこで読むことができます(ただし出版局との了解で、発売からひと月遅れの掲載です)。